「いき」2020 年 11 月号　No.112

展　覧　会　の　絵

牧師　山本 護

秋の連作絵画が展覧会で飾られているかのようです。世界が額縁に切り取られるだけで、どうしてこうも印象深くなるのでしょうか。せつないような、懐しいような、忘れ物をしているような、妙に心がざわめきます。

「展覧会の絵」といえば、D.ムソルグスキー(1839～81)の音楽。それもオリジナルの武骨なピアノ曲よりも、ラベル編曲の華麗な管弦楽版がよく知られています。ロシア芸術を熱く語り合った友人の画家ハルトマン。その遺作展での作品を音楽で描写し、合間には共通の主題を持つ「プロムナード」が幾つか挿入されています。展示絵画はわずか 10 点ですから、逍遥(プロムナード)できるほど広い展示ではなく、ムソルグスキー自身がそれぞれの絵画世界に踏み入って行く歩みをプロムナードとしたのでしょう。

集会所に飾られた秋の連作は、西側の壁に 4 点、南側に 4 点、東側は左右に脇士を据えた大作が 1 点、北側は冷蔵庫のうしろに控えめな 1 点。どの秋へ踏み入っても、プロムナードのように少しずつ異なる、一つの主題が聴こえるかもしれません。

「野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった(ﾏﾀｲ 6:28~29)」。

イエスの故郷、北方のガリラヤは、乾燥地帯のエルサレム周辺とはまるで違います。とりわけ雨季の季節は、イエスが語ったごとくに栄華を極めたソロモンよりも輝いていたでしょう。キリスト教の教えには、沙漠に由来する伝統的な父性と、ガリラヤのたっぷりとした母性とが拮抗し絶妙に調和しています。

八ヶ岳伝道所を巡る環境はどうでしょうか。この静かな秋はもとよりどの季節にも母性は溢れているけれども、エルサレムのような父性は見当たりません。とはいっても、予測のつかない新しい時代、試みながら冒険していくことは父の力だと思います。だから放っておいても、母と父の拮抗は保たれるでしょう。

集会所には秋の絵画が 10 点飾られ、あの「展覧会の絵」と同数。プロムナードの主題が低く響いています。どの絵からでもプロムナードへ歩み出し、秋のたっぷりとした母を身に受けて、父なる新しい時代の中を臆することなく進んでいきましょう。Ω